

遊びは非認知能力を育む

—非認知能力を育む大切なことは？①—

園長 山崎立哉

4月21日から5月13日までの登園自粛にご理解ご協力をいただき有難うございました。5月14日よりこども園を再開して、園内に子どもたちの笑顔と元気な声が戻ってきました。5月25日には関東1都3県と北海道も緊急事態宣言が解除され、全国で自粛期間が解け、これから日常の生活が戻ってくると思います。しかし、終息したわけではありません。これからは、コロナ感染を防止しながら、如何に子どもたちが元気よく遊べるか環境を工夫していくことに注意していきたいと思います。

さて、非認知能力が伸びる時期は、まさに今の乳幼児期が最も育まれます。この非認知能力は、人間の脳の奥にある大脳辺縁系（別名感じる脳）や脳幹部と関連しているそうで、生命維持や危険の察知、安心感、好き嫌いなどの感覚をつかさどる部分で、およそ5歳ごろに原型が完成するようです。0～3歳ごろはこの脳を委縮させず、安定して発達させる大事な年齢です。しかもこの脳は成長とともに認知能力を担当する前頭連合野とつながります。つまり、認知能力を高めるには、まず非認知能力から高めることが大事だということがわかってきたということです。

今の乳幼児期に非認知能力を育む大切なことは、まずは、大人とのかかわりです。親や家族、保育者など、周りの大人が子どもに寄り添い、子どもは大人から無条件に愛されている。これをアタッチメントと言いますが、いつだって助けてくれるという基本的な信頼感と安心感を育てることです。

子どもが泣いたり呼びかけたりしたら、いつも温かく応える。失敗したら頭ごなしに怒らず「大丈夫だよ」「また今度頑張ろうね」と励ます。不安そうな時は寄り添う。そんなかかわりを心がけていくと、その積み重ねで安心感や信頼感が根付き、「ありのままでもいいんだ」という自己肯定感が生まれ、「頑張ってみよう」という前向きな力を育てます。この安心感と、親や家族、保育者に見守られてやりたいことをやる中で、非認知能力の基礎が出来てきます。

子どもたちの「やりたい」という気持ちを大切に、時には大人の目では無駄と思えることもあるかもしれませんが、子どもの好奇心から始まる自発的な活動を尊重していただきたいと思います。